

300



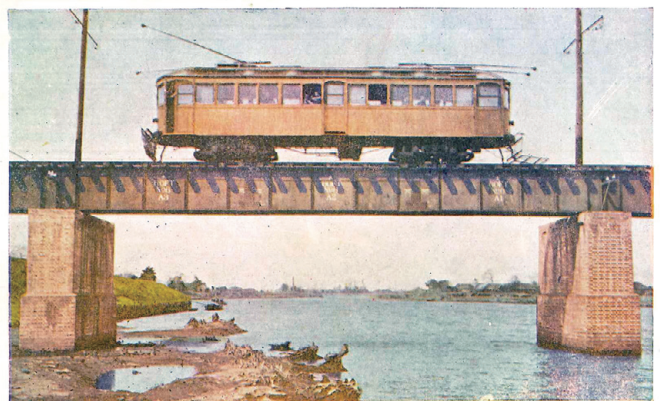
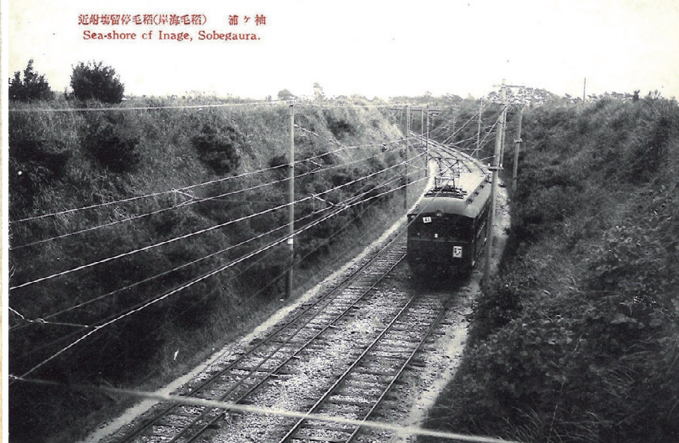
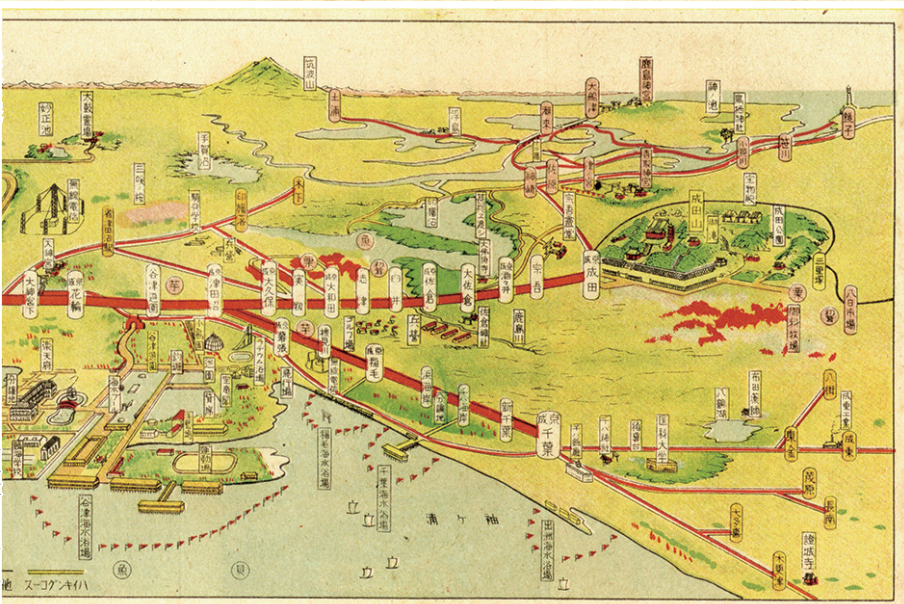
地図と学ぶ

638

2025年11月

地圖中心

そのダイナミックな変遷



京成電鉄 概要と運行状況・形式

京成電鉄路線地形図

京成駅名変遷録

参詣電車から空港電車へ

京成電鉄、路線図・沿線図・鳥瞰図①

京成・市川・人国記

京成電鉄、路線図・沿線図・鳥瞰図②

沿線の名勝・史跡と開業時の経営戦略

荒川放水路と京成線によって創出されたまち景観

短命短路線 白鬚線と谷津支線

改軌と日本初の相互直通運転

京成による成田空港アクセスの歴史

京成電鉄、路線図・沿線図・鳥瞰図③

京成本社の変遷

新京成線から京成松戸線へ

京成本線荒川橋梁架替事業

野月 貴弘

3

編集室

4

編集室

6

今尾 恵介

8

編集室

12

小島 豊美

16

編集室

18

谷口 榮

22

谷口 榮

24

今尾 恵介

27

秋山 千央

30

秋山 千央

34

編集室

38

秋山 千央

40

枝久保 達也

42

早川 潤

48

新刊地形図案内 50

／今月新刊の見どころ！・日本地図センター便り 51

／編集後記・次号予告 52

表紙

上段～中段左：京成電車沿線案内・昭和13年頃（表紙・裏面掲載写真・表面鳥瞰図、個人蔵）／中段右：「京成稲毛駅」千葉方稲丘小学校前付近切り通し（秋山千央提供）／下段左から：「スカイライナー」に使用される二代目AE形。成田空港線内で160km/h運転を行う。（2009年5月、京吾車両基地での完成披露会で、野月貴弘撮影）・京成3000形の兄弟車（同じ形だけど色の違う、北総7500と新京成N800、秋山千央撮影）・中川橋梁を渡る開業時の車両（1形）（秋山千央提供）



京成沿線案内（昭和39〔1964〕～昭和43〔1968〕年、個人蔵）

◆京成電鉄の概要（上図・表紙 部分より転載）

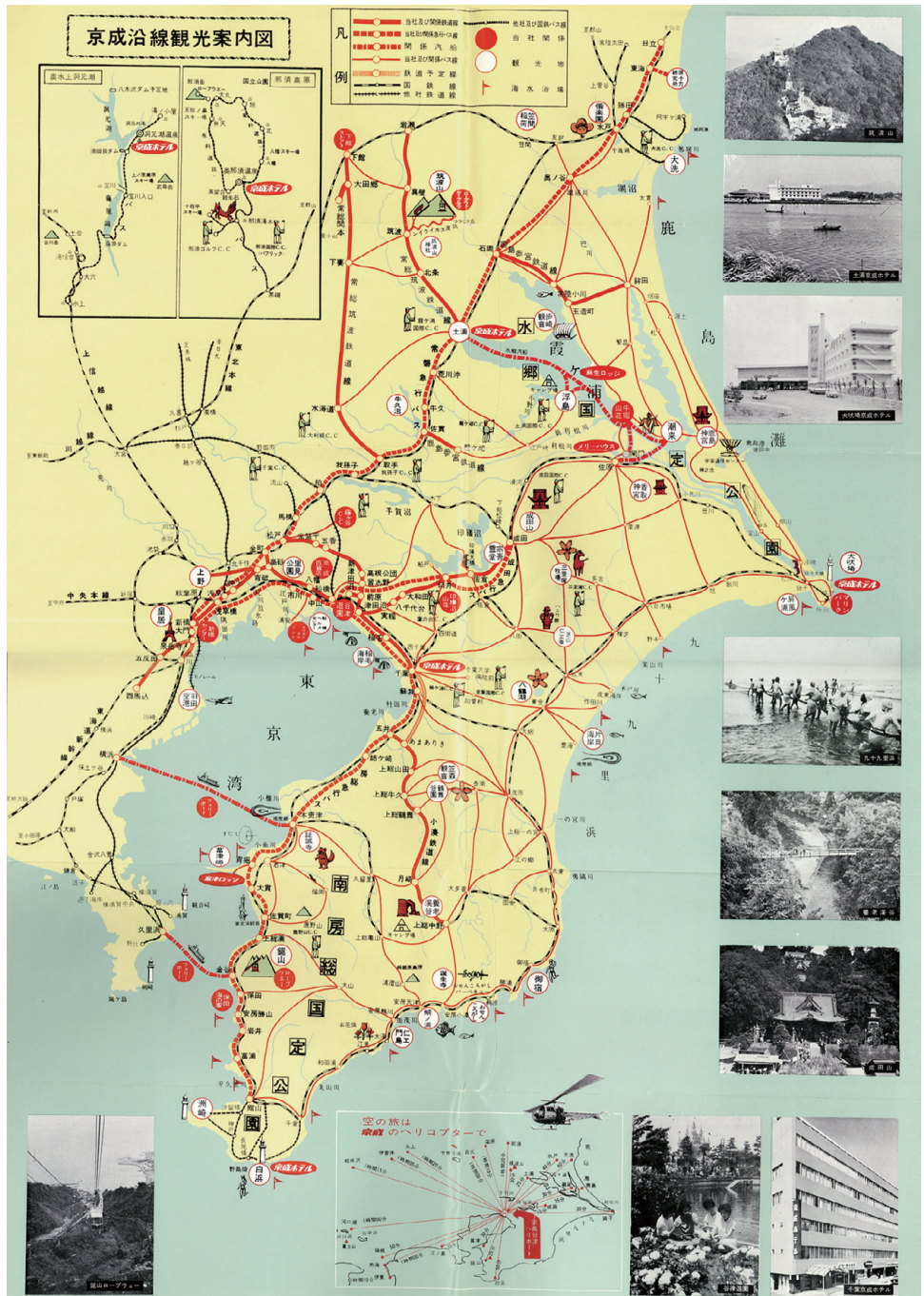
京成電鉄は、東京都、千葉、茨城県に亘り 陸（鉄道、自動車）、海（汽船）の交通機関で活躍している他、谷津遊園、観光ホテル、ゴルフ場、映画館、百貨店、不動産等の副業部門を経営しサービスに努めています。又千葉、茨城両県に亘る総合的な観光開発をし一大観光ルートの造成を計画しています。

◆京成沿線観光案内図（右図・裏面）

この案内図（右図 × 0.35）には、成田山への参拝客輸送を目的のひとつとして、沿線の観光地やその関連施設と思われる写真（①～⑨）が掲載されています。京成電鉄が観光客を呼び込むために作成したもので、昭和の高度経済成長期における沿線の様子をうかがうことができます。

- ①筑波山 ②土浦京成ホテル ③犬吠埼京成ホテル
④九十九里浜 ⑤養老溪谷 ⑥成田山
⑦千葉京成ホテル ⑧谷津遊園 ⑨鋸山ロープウェイ

※ 本号 21～22ページ上段の「京成沿線案内」と同一資料



月刊 地図中心

◆「地図中心」は毎月10日発行です◆

1冊 880円（税込）

地図倶楽部

◆紙版と電子版のご購読会員

年間購読1年間 12冊

プレミアム会員

6,600円（税・送料込）

プレミアム会員（シニア）満65歳以上

5,500円（税・送料込）

◆電子版のみのご購読会員（紙版は送付されません）

地図倶楽部会員	会費（税込）	入会資格
一般会員	5500円	なし
一般会員（シニア）	4400円	満65歳以上
学生会員	2200円	学生または18歳未満の方

地図倶楽部事務局

map-club@jmc.or.jp 03-3485-5417

京成電鉄 概要と運行状況・形式

のぶき たかひろ
野月 貴弘

京成電鉄は、東京都の台東区・荒川区・足立区・墨田区・葛飾区・江戸川区という東部下町エリアから、千葉県北部の成田空港・千葉市・松戸市方面への路線網を持つ鉄道事業者で、16社ある大手私鉄の一つである。旅客営業キロ程は178.8kmで、近鉄・東武・名鉄・東京メトロに次ぐ第五位となる。本線(京成上野～成田空港)・成田空港線(京成高砂～成田空港)・押上線(押上～青砥)・金町線(京成高砂～京成金町)・千葉線(京成津田沼～千葉中央)・千原線(千葉中央～ちはら台)・東成田線(京成成田～東成田)・松戸線(京成津田沼～松戸)の8路線を持つ。本線の空港第2ビル～成田空港間・成田空港線の成田湯川～成田空港間・金町線・千原線・松戸線の Newtown 沼～京成津田沼間が単線、その他はすべて複線である。本線と押上線・金町線・成田空港線(北総線)が分岐する一大ジャンクション青砥～京成高砂間は複々線となっている。

他社線との直通運転が多いのが特徴で、押上線・押上駅から都営浅草線を経て京急線、本線・京成高砂駅経由で北総鉄道北総線、東成田線・東成田駅経由で芝山鉄道線と5社相互直通運転を行っている。また、松戸線は2025年3月まで新京成電鉄松戸線であり、千葉線へ直通運転していたが、4月から京成電鉄に統合され自社内ということになった。なお、成田空港線は京成電鉄が第二種鉄道事業者として、北総鉄道・千葉ニュータウン鉄道・成田高速鉄道アクセス・成田空港高速鉄道の4社の線路を借用し旅客運送を行う「上下分離方式」となっている。

全線が直流1500Vで電化され、軌間は1435mmであるが、これは1959年に従来の1372mmから改軌工事を行ったもので、都営浅草線・京急線に合わせたものだ。わずか2か月足らずの間に運休せずに全線で工事を終えており、車両側の改軌作業も並行して実施するなど、前代未聞の工事を成し遂げた。

列車種別は、最高時速160km/hをほこるAE形(2代目)を使用し、京成上

野から成田空港を結ぶ座席指定有料列車「スカイライナー」が最上位となる。なお、この名称自体が列車種別となっている。これに続くのが、主に羽田空港～成田空港間で運転される「アクセス特急」(都営浅草線・京急線内はエアポート快特)で、両列車とも途中成田空港線(成田スカイアクセス線)を経由する。

本線内列車は、通勤時間帯にAE形で運転される座席指定有料列車「モーニングライナー」「イブニングライナー」、成田山初詣の際などに運転される臨時列車「シティライナー」が最上位で、これに快速特急が続く。以下、特急・通勤特急・快速・普通があり、種別が多いのが特徴だ。日中、運賃以外の料金不要の一般列車は、京成上野発着列車と、押上経由の都営浅草線・京急線への直通列車が半々の割合で運転されている。本線は8両編成が大半で、普通列車はホーム有効長の関係で6両編成が多い。押上線・成田空港線は全列車8両編成で運転される。金町線は4両編成、千葉線・千原線は4または6両編成、松戸線は6両編成で運転され、それぞれ全列車が普通列車である。東成田線は芝山鉄道線(東成田～芝山千代田2.2km)と一体で運用され、本線内列車と同じ種別が設定されている。朝夕を中心に8両編成の浅草線・京急線直通列車も走り、日中の普通は4両編成で運転される。

車両は前述のAE形、一般列車用は新しい順に3200・3100・3000・3400・3700・3600・3500形で、3000番台に集中している。これは都営浅草線に直通する車両への車番の割り当てによるもので、京急が1000、京成が3000、都営が5000という取り決めがあり、京成の一般列車用形式はすべて直通運転対応のため、3000番台にひしめき合う事となった。3200・3100・3000は二代目に突入しており、これは京急1000形も同様である。

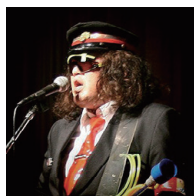
元・新京成車両は80000・N800・8900・8800形で、こちらは直通先の京成電鉄の車両番号と重複しない上で、末広がり縁起の良い「八」を採用した

ものである。新京成のコーポレートカラーであるピンクを纏うが、今後は京成のカラーに変更されていくようだ。この他京急・都営・北総鉄道・千葉ニュータウン鉄道・芝山鉄道所属車が乗り入れるため、京成線内を走行する車両のバリエーションは非常に多彩だ。

一般的には成田国際空港への鉄道というイメージが強く、1978年の開港と同時に空港アクセス列車として運行を開始した「スカイライナー」が京成電鉄の代名詞となろう。当時の成田空港駅は現在の東成田駅であり、空港ターミナルビルへは連絡バスに乗り継ぐ必要があった。当初アクセス輸送として計画されていた成田新幹線の建設反対を受け、京成電鉄にお鉢が回ったものの、空港ターミナルビル直下へは成田新幹線の乗り入れが優先され建設が進んでいいたため、このような弊害を生んだ。都心から50～60km程度と遠く、不便な国際空港と呼ばれていた成田空港。「スカイライナー」には定速度運転機能を備えた新型車両AE形(初代)を投入し、線路側の改良などで表定速度を向上。60分という所要時間を実現させるため、成田山新勝寺への参拝客輸送を目的に創立された京成電鉄が、その最寄駅である京成成田を通過させてまで速達性を重んじて運行を開始した。1991年3月には、成田新幹線の設備を活かした空港ターミナルビル直下の、現在の成田空港駅が開業。JR東日本とともに乗り入れを開始した。成田新幹線路盤を活用した成田空港線を、新幹線以外の日本の鉄道では最速の時速160km/hで駆け抜け、日暮里～空港第2ビル間最速36分を実現しており、まさに留飲を下げた格好となった。

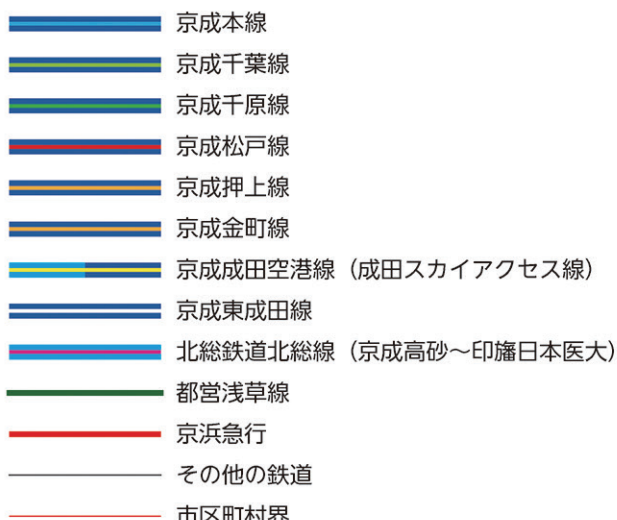
野月 貴弘

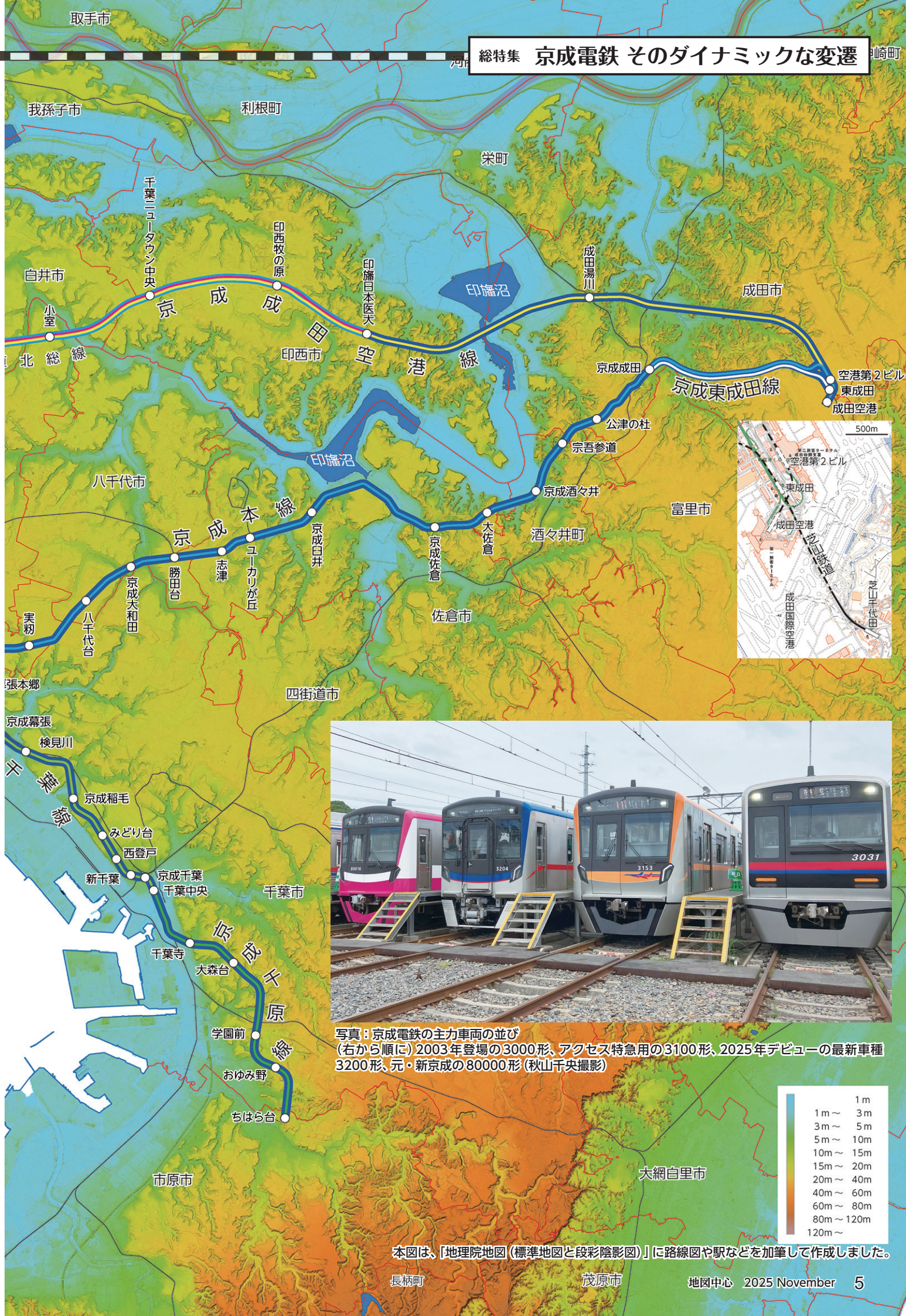
テクノユニット
SUPERBELL"Z"の中心
人物、車掌DJ
&ボーカル。
スーパーベル
ズオフィシャル
ウェブサイト「鉄音寺」
<http://www.superbellz.com/>





編輯室





写真：京成電鉄の主力車両の並び
(右から順に) 2003年登場の3000形、アクセス特急用の3100形、2025年デビューの最新車種3200形、元・新京成の80000形 (秋山千央撮影)

編集後記

京成電鉄の沿線とは縁もゆかりもない地域で生まれ育った私ですが、高校時代、時間を見つけては京成押上線によく足を運んでいました。いわゆる“テツ”の端くれとして、京成だけでなく、都営・京急・北総など、さまざまな種類の車両が行き交う押上線の姿に惹かれていました。

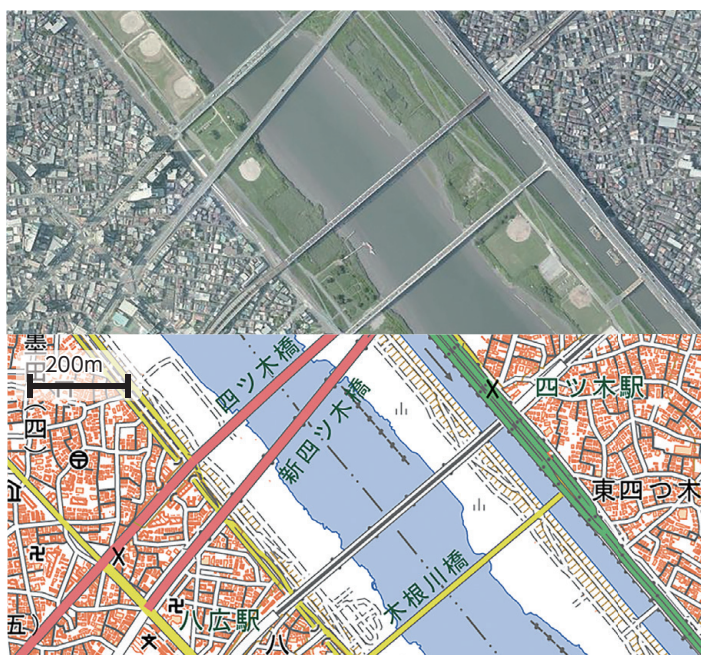
ですが、今振り返ると、私を引きつけていたのは車両以上に、沿線の空気だったのかもしれません。車窓に流れる街並みだけでなく、晴れた日に荒川を渡る鉄橋から見た青空と水面、土手の緑——その鮮やかな風景が、心に焼きついています。当時よく聴いていた音楽のミュージックビデオも、ちょうど川沿いの景色を舞台にしている、押上線の車内でその曲を聴きながら荒川を渡る瞬間は、まるで自分がその映像の中にいるような気分になったものでした。

今回、京成電鉄の特集を編集するにあたり、そんな過去の日の情景が、ふと蘇りました。

(編集室・高橋悠)



撮影：小林政能
京成押上線 四ツ木～八広間にて



地理院地図 (2025年10月取得)

次号予告 2025年12月 通巻 639号

毎月10日発行

地図と学ぶ月刊

地図中心

特集

津々浦々の城 —海・川・湖と城郭の関係—

日本の城の中には、海・川・湖などの水域を巧みに利用して築かれた城があります。守備側にとって水域は敵の進軍を阻む防壁であり、攻撃側は水を制することに腐心しました。地形と水域は、攻防の鍵そのもの。

戦国の知恵と技術が凝縮された津々浦々の日本の城を水から読み解きます。



迅速測図原図茨城県下総国西葛飾郡古河町明治17年

バックナンバーのご案内

地図中心

検索

「地図倶楽部」へのご入会をお待ちしています! 03-3485-5417(事務局)

地図中心

2025-11 通巻 638号

発行 2025年11月10日

発行所 一般財団法人日本地図センター

〒153-8522

東京都目黒区青葉台4-9-6

電話 03-3485-8125

FAX 03-3485-5593

(月刊「地図中心」編集室)

メール chushin@jmc.or.jp

URL https://www.jmc.or.jp

©一般財団法人日本地図センター

定価 880円(税込)

印刷所 昭栄印刷株式会社

地図と学ぶ月刊誌



本誌の一部あるいは全部を無断で複写・複製・転載することは、法律で認められた場合を除き、禁じられています。

発行 一般財団法人日本地図センター 定価 880円(税込)

雑誌 86689-11



4910866891154
00800